

ヒブワクチンを接種しよう！

2009.1.26

愛媛生協病院小児科

大切なヒブワクチンとは、どんなワクチンですか？

小児の救急医療の現場で、病気が重症化して死亡したり、重大な後遺症が残ったりする病気に細菌性髄膜炎と急性喉頭蓋炎があります。この病気の原因にはヘモフィルス インフルエンザ b 型という細菌があり、略して Hib（ヒブ）と呼ばれています。日本では、年間 1000 人近くの小児が細菌性髄膜炎に罹患しています。細菌性髄膜炎と急性喉頭蓋炎は、発症早期の診断が非常に難しく、治療開始が遅れて重症化することも稀ではありません。

この重大な病気は、ヒブワクチンという予防接種で発病を防ぐことが出来るのです。ヒブワクチンが普及した国では、Hib による重症感染症は消滅したと言ってもよい程の効果があるとされています。WHO は、1998 年に乳児への定期接種の実施を世界各国に勧告しました。現在では 110 カ国以上で実施されており、東アジアで接種できないのは日本と北朝鮮だけでしたが、日本では 2008 年 1 月に認可され、ようやく 2008 年 12 月に発売されました。（なお、Hib は細菌の一種であり、インフルエンザウイルスとは異なります）

接種の費用はどのくらいかかりますか？

残念ながら当初は任意接種の扱いとなり、接種費用は自費となります。当院では、8000 円（組合員：7200 円）となります。

ヒブワクチンの接種スケジュールはどのように考えるのですか？

①基本接種（7 ヶ月未満児、生後 2 ヶ月から接種可能）

4～8 週間隔で 3 回接種（医師が必要と認めた場合は 3 週間の間隔で接種も可能）

その後、おおむね 1 年の間隔をおいて追加接種 1 回。合計 4 回接種。

三種混合（DPT）と同時接種も可能です。（左右上腕に同時接種、混注は不可）

BCG 接種の時期と重なり、BCG 接種後は 4 週間間隔をあけて接種することになるので、医師と相談してください。

②生後 7 ヶ月～12 ヶ月未満の場合

4～8 週間隔で 2 回接種、その後 1 年あけて追加接種。合計 3 回接種。

ポリオ生ワクチンや三種混合（DPT）と重なる時期ですが、他のワクチンと同時接種も不可能ではないので、医師と相談してください。

③1 歳～5 歳未満

1 回接種で終了。

保育園や幼稚園の集団生活に入る前に、接種を完了することが望ましいとされています。

ヒブワクチンは、なぜ早く接種しなければならないのですか？

Hib は鼻の奥に潜んでいて、それが血流を介して髄膜炎を起こします。3 歳を過ぎると Hib の不顕性感染（無症状の軽症感染）の結果、自然抗体を獲得するようになります。Hib による細菌性髄膜炎の発生率は、生後 3 ヶ月を過ぎると急速に増加し、3 歳を過ぎると減

少してきます。こうした理由で乳児期早期にヒブワクチンを接種することが必要なのです。

ヒブワクチンの副反応はどの程度ありますか？

現行の三種混合ワクチン（DPT）の副反応発現率と同等かそれ以下とされています。

すべての先進国で、10年以上前から定期接種とされており、日本で使用されるヒブワクチン（アクトヒブ）だけで全世界の子ども達1億5千万人以上に接種された実績があります。乳幼児に Hib ワクチンを接種することは世界の常識であり、外国で生まれて日本に帰国する日本人小児のほとんどの方は、生まれた外国でヒブワクチンを接種しています。

なお、製造の初期段階で牛の成分が使用され、その後の精製工程を経て製品化されていますが、そのことによる不都合は、これまで1件も報告されていません。

接種時にはどのような注意が必要ですか？

発熱がなく、カゼ等の症状がなく元気であれば、医師の診察で接種可能となります。

予診票を書いて頂くので、その際にお渡しする説明書をよくお読み頂き、保護者の署名を頂くことになっています。

接種後 30 分間は院内で経過を見て、強い副反応の出現がないのを確認してから、帰宅して頂きます。当日入浴は可能です。

ヒブワクチン接種には予約が必要ですか？

ワクチンの供給は安定しているとは言えない状態で、入手に時間を要することも予測されますので、予約が必要です。当院で接種する場合は、小児科外来に電話で予約してください。氏名、生年月日、電話番号をお知らせください。

ヒブワクチンを発注して、接種可能になったら、当方より電話連絡致します。

最後に

経済的に余裕がない家庭の子どもが、ワクチンを接種できないという差別的な格差があることは、子どもの人権問題です。

子どもたちを守るために、そして健康被害が発生した時の適切な救済措置のためにも、法的にも公費負担での「定期接種」として実施することが望まれます。

細菌性髄膜炎の原因となる細菌には、肺炎球菌という細菌もあるのですが、これに対するワクチン（小児用）も先進国では実施されていますが、日本では検討が始まったばかりです。

ヒブワクチンと肺炎球菌ワクチンとが普及すれば、小児の救急医療の問題も軽減すると思われます。

「細菌性髄膜炎から子どもたちを守る会」のホームページも御覧ください。

<http://zuimakuen.net/>